

遠からずして露國の膝下に拜跪するに至るの日あるべきは、燎々火を觀るよりも明なり。況んや露國が銳意其の心血を傾注して、其の勢力扶植の策を講じつゝ、在るに於てをや。惜い哉清國未だ悟らず、晏然長夜の昏睡中に在ること。

更に轉じて西南の境土を望めば、崑崙山脈を隔て、英領印度あり。英國が印度を根據として、常に露國の中央亞細亞經綸に對抗し來れるは、一朝一夕の事に非らず。由來巴密爾高原は、禍機の伏在するの地、而も新疆と相接壤するが故に、露國が指を新疆に染めんと欲すれば、英國豈に黙して已むべけんや。形勢の變化は、元と意外の邊より急轉し來ること有り。現今未だ危機の切迫せるもの有るを見ずと雖も、巴密爾問題忽然として起らば、新疆も亦其の渦中に投入せらるゝ無きを保すべからず。清國人たる者宜しく未だ雨ふらざるに牖戸を綢繆するを要すると共に、我國經世の士亦多大の注意を拂はずして可ならんや。

由來南北支那に對して、講究研鑽するの士尠からざるも、新疆に就て言及するの人甚だ稀なるに似たり。是れ吾人の切に遺憾とする所にして、識者の一考を煩はさざるを得ず。夫れ新疆の地たる、我國と相距ること數千里の遠きに僻在し、我國